

「ソフトパワー」としての日本の桜

在英ジャーナリスト・

ノンフィクション作家 阿部菜穂子

桜の季節がめぐってきた。

第64 回日本エッセイスト・クラブ賞を頂いた著書『チェリー・イングラム——日本の桜を救ったイギリス人』（2016年、岩波書店）は桜に関する物語だった。20 世紀に日本の桜の虜になり、イギリスや欧州諸国に桜を紹介したイギリス人園芸家、コリングウッド・イングラムの業績をまとめた本である。出版以来、私は桜と長く、深く関係することになった。

私はイギリス在住で、その後2019年にロンドンで本書の英語版をペンギン社から刊行した。それが思いのほか好評で、ドイツ語、スペイン語、イタリア語などに翻訳された。

目を見張ったのは、本の出版とともに、各地で桜の植樹が広がったことである。イギリス国内だけでも、たとえばオックスフォード大学付属樹木園で数百本の桜を植樹する企画が持ち上がり、現在進行中である。また、東部サフォーク州に住む桜愛好家の貴族が、所有する土地に「桜公園」を作る計画を立て、植樹を始めた。ほかにも由緒ある庭園などで多くの桜植樹プロジェクトが進んでいる。

そして、著者の私は、植樹式や桜に関係したイベントが開催されるたびに呼ばれ、チェリー・イングラムや日本の桜の歴史について話すことになった。この春も、イギリス国内やベル

ギー、オランダなどで講演した。欧州の人々の桜への関心は、驚くほど高い。

その後、2024年にロンドンで、やはりペンギン社から新著『The Martyr and the Red

Kinono』を刊行するに至ったが、この本でもまた、桜が重要な役割を果たしている。同書は第二次世界大戦中にアウシュヴィッツ収容所で他人の身代りとなって亡くなったポーランド人のマキシミリアノ・コルベ神父と、神父の行為に深く影響され、生涯平和を追求した2人の日本人（一人は長崎原爆の生存者で修道士だった小崎登明さん―故人―、もう一人は北海道の桜守、浅利政俊さん―現在95歳―）の軌跡をたどる物語だが、日本の桜が横糸となって3人の人生を繋ぐ。

このように過去10年間、桜とかかわる中で気づいたことがある。それは、桜には友情や愛情の象徴として重要なメッセージを運び、人と人を繋ぐ力がある、ということだ。人々は桜を通じて日本の文化や歴史に興味を持ってくれる。桜を見に行きたい、もっと日本を知りたい、と実際に日本まで足を運ぶ人も後をたたない。彼らは訪日するとすっかり親日家となって帰ってくる。桜はまさに「親善大使」なのである。

私が桜の話をするとき、欧州の人々がとりわけ関心を持って聞いてくれる箇所がある。それは、「平和の象徴」としての桜について語るときである。日本は先の大戦への反省から戦後平和国家として生まれ変わり、80年間一度も戦争をせずに今日まできた。唯一の被爆国として

「非核3原則」を守り、平和憲法も保持する。

新著に登場する浅利政俊さんは戦後、116種類の新種の桜（総称して「松前桜」と呼ばれる）を創作した育種家として知られるが、50年以上にわたり、「平和のメッセージ」を世界に発信し続けている。浅利さんは大戦中の日本軍の行為の償いの意を込め、和解と友好関係を築くことを目的に、諸外国に自身の桜を無償で贈り続けてきたのである。「日本は二度と戦争をしない」との強いメッセージを込めて。他の二人の主人公、コルベ神父と小崎登明さんも人類的「共存と和解」を求め、「平和」を訴えた。3人は互いの面識はなかったが、浅利さんの桜が40年前にポーランドへ渡り、3人の平和への願いを収斂させて今も咲き続けているのである。

講演会でこのような話をする、多くの人々が共感してくれる。大国の横暴や争いが絶えない現在の世界情勢の中で「桜は平和と協調の大切さを教えてくれる」との感想も寄せられる。

日本では、2月の衆院選で自民党が歴史的な勝利を収めた。高市首相の掲げる政策には、これまでどの平和国家の基盤を揺るがすものもいくつも含まれている。日本は今、重大な岐路にある。私は、日本の強みは軍事大国になることではなく、「戦争をしない国」として、平和と共存を願う他の国々と協調していくことにこそ、あると思う。桜は、日本が掲げてきた平和のメッセージを運ぶ、重要なソフトパワーである。

平和国家としての日本の立ち位置を堂々と世界に主張し、連帯を呼びかけることが大切なのではないだろうか。

私は現在、ウクライナに浅利政俊さんの松前桜を贈る企画を、在英日本人やワルシャワ在住日本人と連携して進めている。一刻も早く戦争が終わり、平和な日々が戻ることを祈りながら。ウクライナの人たちは、桜を受け取れることを心待ちにしてくれている。戦禍に苦しむ人々に希望を運ぶ、このような支援にも重要な意味があると思っている。